



ふくりゅう

特定非営利活動法人
日本下水道文化研究会会報

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成16年10月25日

通巻39号

第31回定例研究会のお知らせ

本年度最初の定例研究会を下記のとおり開催いたします。ふるってご参加ください。

日時：平成16年11月24日(水)18時30分より

講師：(財)廃棄物研究財団常務理事 八木 美雄氏

演題：「楠本正康先生と浄化槽」

内容：浄化槽に係わる技術者養成・調査研究等を業務としている財団法人日本環境整備教育センターの初代理事長・楠本正康先生の合併処理浄化槽開発にかけた情熱の軌跡を紹介する。併せて、浄化槽に関連する法律についても概説する。

場所：東京ボランティア・市民活動センター
C会議室(セントラルプラザ 10階)

【八木美雄氏プロフィール】厚生省を退官後、(財)廃棄物研究財団、(財)日本環境整備教育センター常任理事を経て、現在(財)廃棄物研究財団常務理事。機関誌「月刊浄化槽」に講座「浄化槽関連法・入門」、「楠本先生、簡易水道と浄化槽と」を執筆したほか、月刊誌「水」に紀行記「土地を歩く」を連載中です。

資料として、「楠本先生、簡易水道と浄化槽と」(月刊浄化槽 2003年10月号)、「浄化槽関連法入門」(日本環境整備教育センター、平成16年4月)を用います。

【会場案内】新宿区神楽河岸1-1

電話 03-3235-1171

JR,地下鉄 飯田橋駅下車 徒歩1分

2004年バルトン忌 報告 ~ 曾孫の鳥海幸子さんとともに ~

バルトン先生没後105年目となる今年は、京都から曾孫の鳥海幸子さんをお迎えすることができ、心あたたまるバルトン忌となりました。鳥海さんは、バルトン先生の一人娘たま子さんの三人のお子さんのうち、長女たえ子さんの長女にあたる方です。たま子さんはその晩年を京都の鳥海さんご一家とともに過ごされたということです。

墓参

8月7日土曜日の朝、蝉時雨のなかを25名あまりの関係者が青山霊園に集いました。当研究会酒井代表の「明治の日本で困難な事業に立ち向かわれたバルトン先生を思い、私たちもバン格拉デシュでのトイレ改善プロジェクトに取り組んでいます。」という力強い挨拶のあと、鳥海さんが「毎年、皆さまに曾祖父バルトンを偲んでいただき、私どもの知らなかったさまざまな業績を発掘していただいて、ほんとうにありがたく思っております。」と感慨深げに言葉を述べられました。続いて、参加者全員が墓碑の前の遺影に菊の花を捧げ、スコットランドの祈りの曲「アメイジング・グレイス」を合唱しました。鳥海さんの美しいソプラ



バルトン先生の墓碑と遺影(左)、挨拶される鳥海さん(中)、大正2年21歳のたまさんとその左に座っている2歳のたえ子さん(右)

ノの歌声は、きっとバルトン先生に届いたことでしょう。

講演会

『磐梯山大噴火の幻灯写真』

午後は、日本水道会館において、国立科学博物館の大迫正弘先生の講演が行われました。2003年秋、国立科学博物館所蔵の『磐梯山大噴火(明治21年)の幻灯写真』の多くがバルトン先生撮影の写真であることがわかり、興味深い論文が発表されました。論文執筆者の一人である大迫先生は、地球物理学の研究者で、バルトンとの出会いは「濃尾大地震の写真集」であったということで、快



大迫正弘先生

く講演を引き受けて下さいました。

当時ランタン・スライドと呼ばれていた幻灯写真は、保護ガラス、紙の枠、画像のガラスなど五層になっていて、バルトン先生の手法は、他の写真家のカーボンによる湿板と違い、ゼラチン、感光膜による乾板であったそうです。

百十六年も前の写真とは思えない迫力ある磐梯山大噴火写真の映像に引き込まれ、大迫先生の綿密な調査に基づく解説にうなづきながら、あらためてバルトン先生の幅広い活動に驚かすにはいられませんでした。火山噴火が頻発する現在、貴重な資料となっているようです。

着物姿の写真

講演会のあと、鳥海さん、大迫先生とともにビールで献杯、歓談のひとつきを過ごしました。A. コナン・ドイル(シャーロック・ホームズの作者でバルトンの親友) 研究家、石井さん提供の『着物姿のバルトン先生』の写真には、「なかなか似合いますなあ。」「足が下駄からはみ出していますね。」「足袋は歩きにくかったんじゃないですか。」



墓前での記念撮影

と思わず笑いが...

翌日は、W. K. バルトンが衛生工学教師を勤め、住まいの官舎もあった東京大学へと鳥海さんをご案内し、タイムトンネルを通ったような不思議な時間を過ごしました。

毎年バルトン忌のたびに感じ入るのですが、暑さのなかをご参加下さる皆さま、あたたかく誠実なご支援やお世話を続けて下さっている皆さまに、心より感謝申し上げます。司会の椿本さんの言葉にもありましたが、2005年は原点にもどって、島根県など各地で研究がすすめられている上下水道計画におけるバルトン先生の足跡をたどり、この分野の未来へとつながるバルトン忌となりますようお願いしております。

(蓼倉虫 b)



特性の木箱にスライドが納められている(左)、 磐梯山噴火の写真[W.K.バルトン撮影](中)、和服姿のバルトン先生(右に座っているのは写真の弟子鹿島清兵衛)(右)

平成16年度屎尿研究会特別企画の報告

屎尿研究会の例会は、午後6時30分からの講話とそれにとともなう質疑応答が定番になっていますが、「たまには明るい昼間にそれもアクティブな企画を・・・」との声を受けて、「会津若松周辺の歴史的建造物を見学する会」を企画・実施しました。今回は、機動性を持たせるため全て車による移動とした関係で人数に限りがあり、口コミによる参加募集とさせていただきます。

以下に、見学した建造物の概要(トイレを主体)を報告いたします。

実施日時：平成16年8月22日(日)～23日(月)

参加人員：9名

見学場所：会津武家屋敷(会津若松市)、喜多方蔵の里(喜多方市)、大内宿の町並み(下郷町)、安積(あさか)疎水十六橋水門(猪苗代湖・日橋川)

会津武家屋敷

旧会津藩家老屋敷：江戸時代後期の建築を復元(筆頭家老・西郷頼母の屋敷。棧瓦葺き、入母屋造)

上便所(引出式砂雪隠、箱車。藩主用、畳3枚敷き、黒漆塗りの大便器。天井がない)

下便所(汲取り式、大・小。家老一家用、板床張り)

下便所(汲取り式、大・大。女中用、各約1畳)

旧中畑陣屋：天保年間の建築を移築、旗本・松平軍次郎(5000石)の代官陣屋。

旧所在地：西白河郡矢吹町。茅葺き、寄棟造。県指定重要文化財)

上便所(木製便器、奥座敷の棚の真裏)

下便所(床板の中央部を切り落とした四角い穴、金隠しの板もない)

喜多方蔵の里

喜多方の町は2000棟以上の蔵造の建物が軒を連ね(多くは明治から大正にかけて建築)、観光コースになっている商店もある。

移築した家屋が2軒のほか、明治時代後期の建築(棧瓦葺き、切妻造、白壁土蔵)を復元。

冠木(かぶき)薬店廁蔵：喜多方市3丁目4800、中央通りに現存。江戸時代からの薬店、平成元年3月まで使用。女



冠木薬局廁蔵 現存する土蔵は、八代目の時(明治後期)廁蔵として建てられ、平成元年3月まで使用された。

性用と男性用が区別、男性小便所は、廁蔵と主屋との間の庇部分にある。

大内宿

会津西街道(会津と日光・江戸を結ぶ重要な街道)の宿場、茅葺き屋根約40軒、国の伝統的建造物保存地区。道の両側には、細い水路に水が流れ野菜や飲み物などがカゴに入れて冷やされている。電柱、電線がない。軒先や座敷を利用しての物産店・茶屋・民宿。



大内宿の町並み

安積疎水十六橋水門

安積疎水は郡山周辺の灌がい用水として開削された猪苗代湖からの用水路(明治15年通水)。十六橋水門は、安積疎水の取水の安定化を図るために、猪苗代湖の水位を調節する目的で、会津若松側への流出河川である日橋川に設けた水門である。

所感；

文献上の記述や絵・写真などから得られる情報に比べて、実物(復元物を含む)からのそれは、圧倒的なインパクトで、瞬時にかつ立体的・多面的に私たちの脳裏に焼き付けてくれました。まさに、「百聞は一見に如かず」でした。(し尿研究会会長 地田修一)



‘04年・秋 「中川金治翁を偲ぶの会」のお知らせ

昨年11月、中川神社は多くの皆様のご篤志により新たに落成いたしました。今年からは毎年この日(11月23日)を中心に、金治翁の業績に感謝するとともに、「翁を偲ぶ会」が地元丹波山で結成された中川神社奉賛会の主催で開催されることになりました。

本会も後援団体として協力しています。今年、稲場紀久雄博士(大阪経済大学教授)による、村に伝わる楽しくも哀しい物語の紙芝居「龍魂淵の伝説」(新作未発表)の上演と地元獵友会献上の“山の幸”(猪、鹿、熊のなかから)の馳走も予定さ



昨年再建された中川神社

れております。下記日程より、ご都合のつくところからで結構です。多数のご参加をお待ちしております。お申し込みは、氏名・住所・連絡方法(電話番号等)とともに、何日・何時ごろから参加されるのかをお知らせください。

記

前夜祭:

上記紙芝居上演、山の幸賞味

11月22日(月)午後5時30分～8時30分

丹波山村・

民宿「たちばな」にて(TEL 0428-88-0308)

一泊二食付き 6,500円

交通(電車バスの場合): JR 奥多摩駅より西東京バス丹波行きで約1時間。終点ひとつ手前の「中宿」下車。

バス時刻表は次の URL で。<http://www.nisitokyobus.co.jp/topics/2004aki-daiyakaisei-0901.htm>

記念登山(有志:サオウラ峠中川神社参詣・往復)

11月23日 午前8時～12時(下山後入浴解散)

連絡・問合せは藤森正法さん

(TEL 090-4132-5501、FAX03-3801-4848)まで

多摩源流祭り参加記

小平市 大谷 啓

このたび初めて源流祭りに参加いたしました。藤森さんのおかげで大変楽しい思い出となりました。昼のいのしし汁ほかのバイキング、夜の修行者のたいまつはまさに圧巻でした。花火も印象的でした。翌日の温泉もよかったです。

メンバーの皆様のご尽力に感謝しています。良い仲間にもめぐり合え、楽しい雰囲気でも過ごすことができ、本当に素晴らしい時を過ごすことができました。ありがとうございました。

第31回屎尿研究会例会のお知らせ

| | |
|----|--|
| 日時 | 平成16年12月17日(金)18時30分より |
| 講話 | 相原 篤郎氏(本会会員、東京都下水道局)「平安・鎌倉におけるし尿にまつわるよもやま話」 |
| 内容 | 物語・説話文学や絵巻物などからうかがい知ることのできる古の時代の「屎尿についての認識」を、現代のそれと比較しようとするものである。 |
| 場所 | 東京ボランティア・市民活動センター セントラルプラザ10階 B会議室 新宿区神楽河岸1-1 TEL: 03-3235-1171 JR、地下鉄 飯田橋駅下車徒歩1分 |

屎尿研究会例会・今後の予定

1. 「世界のトイレ博物館を巡って」 関野勉氏(10月22日)ふくりゅう38号でお知らせ。
2. 「楠本正康先生と浄化槽」 八木美雄氏(廃棄物研究財団、1面参照)
3. 「平安・鎌倉における屎尿にまつわるよもやま話」 相原篤郎氏(上記参照)
4. 「埋蔵文化財からみたトイレと下水道(仮題)」 仲光克顕氏(中央区教育委員会、17年1月14日)
5. 「町触れからみた江戸の下水道(仮題)」 柳下重雄氏(本会会員、17年3月予定)

いずれも会場は、東京ボランティア・市民活動センター(飯田橋・セントラルプラザ10階)の会議室です。1, 4はA会議室、2はC会議室、3はB会議室です。なお、2, 4, 5は、定例研究会とのジョイントとして行います。

前号でお知らせしましたバングラデシュ・スタディツアーを行いました。参加者は2名とややさびしかったのですが、ゼネストの合間を縫って、ダッカ以外の都市へも出かけていきました。主な訪問先は次の通りでした。

- 8月29日：アジアヒ素ネットワークの飲料水ヒ素汚染対策プロジェクトサイト(ジョソール県シャーシャ郡)でパイプ給水施設、ポンドサンドフィルター施設など見学
- 8月31日 - 9月2日：Bangladesh Academy for Rural

Development(BARD)訪問、講義を受け、農村開発パイロット事業を行っている村を訪問し、村の人たちのミーティングなどを見学、周辺の遺跡訪問

- 9月3・4日：本会のプロジェクト予定地域を訪問し村の人たちと交流

参加したお二人から参加記を投稿していただきました。国際交流の難しさを若い人なりに感じられたようです。

バングラデシュ・スタディツアーに参加して

東京都立大学大学院工学研究科 井家上 孝

私が今回のスタディツアーについて知ったのは、就職活動が一段落し、精神的にも時間的にも少し余裕のできた時期であった。途上国における水資源に関する問題について少なからず興味を持っていた私にとってはこのスタディツアーは、実際にそれらの問題を肌で感じることのできる絶好の機会であったため、躊躇する理由は特になかった。しかし、私の中でバングラデシュは洪水の多い貧しい国という程度の認識しかなく、その他で知っていたことといえば首都がダッカであるということぐらいだった。特に深く考えることもなく、ただ「途上国」、「水」というキーワードとそしてバングラデシュという国に対する「もの珍しさ」からちょっとした旅行気分での参加を決意したというのが本心である。

ダッカに到着したのは深夜だったにも関わらず、想像していた以上に騒々しく、埃っぽい街であった。この国ではアジア特有のツーリスト産業もほとんど存在しないようで、滞在期間中も旅行者を見かけることはほとんどなかった。話には聞いていたが、一国の首都でありながらここまで旅行者を目にすることがない国も珍しいと感じた。

バングラデシュで過ごした十日間は驚きと退屈の繰り返しであった。ホルタルと呼ばれるストライキの影響により外出ができない日もあれば、一日のほとんどを移動に費やすような忙しい日もあった。特に、交通に関してはルールというものが全く存在しないように感じられるほど、無秩序な状態であった。そのような点から、日本とバングラデシュの間の大きな国民性の違いが垣間見られた。また、今回のスタディツアーに参加して初めて、



バングラデシュの複雑な国内情勢、地下水のヒ素汚染問題等を知ることとなった。

バングラデシュは世界でも有数のNGO大国、被援助国であり、数多くのNGOが様々な分野で活動を行っている。今回のスタディツアーでも現地のNGOをはじめ多くの方々と接する機会が多かった。その中でも、日本のNGOであるAAN(アジアヒ素ネットワーク)のプロジェクトは、衛生工学(上下水道工学)を専攻している私にとって非常に興味深いものであった。バングラデシュでは、地下水のヒ素汚染が問題となっており、人々が安心して口にすることのできる飲料水が非常に乏しい。そのためJICAとAANによって数々の対策が講じられており、そのなかでも今回訪れたプロジェクトサイトは国内でも特にヒ素汚染の深刻な地域であった。簡単にヒ素汚染と言っても、私にとってはあまり実感がわかず、ましてや実際にヒ素中毒者を目にすると想像もしていなかった。彼らの姿を見て、知識にすぎなかったヒ素汚染問題が私の中で初めて現実のものとなり、この問題の抱える深刻さを実感した。

この地域でAANが行ってきたプロジェクトは確かに現地の人々に受け入れられ、喜ばれているように感じられた。この時点では、援助というものが、援助する側の気持ち一つで簡単に実現し、受け入れられるものであり、国民性の違いなどどうにでもなるものだと思えた。しかし実際にAANの方々からプロジェクトの話について聞かされたとき、私が大きな勘違いをしていたことに気づかされた。現実には、国民性の違いがプロジェクトに及ぼす影響は非常に大きく、一筋縄でいくものではない。日本人の感覚で最善の援助策を持ちかけたとしても、それは簡単には受け入れてもらうことはできず、仮に受け入れられたとしてもプロジェクトの過程において簡単に裏切られる例も少なくない。これまで私の考えてきた途上国への援助というものが如何に理想論に過ぎず、現実的でないかを思い知らされ、改めて援助ということの難しさについて考えさせられた気がする。援助というと聞こえは良いが、それは一歩間違えば先進国のエゴとも捉えられ兼ねない。しかし援助する側は基本的に良かれと思って行っていることであるため、両者の間に生まれる溝は思いのほか大きいかもしれない。

今回のスタディツアーに参加したことで、「本当の援助とは何か」という私の中での命題に対する自分なり

の答えを見つける手がかりが得られたような気がする。それを言葉にして説明することは簡単なことではないが、少なくとも「援助」というものには「援助する側」と「受ける側」の二つの立場があり、それぞれに複雑な事情や感情、あるいは国民性の違いが密接に関わり合っているということを常に念頭において置かなければならないということが挙げられる。

こういった複雑な思いをしながらも農村部の子供達の屈託のない笑顔を眺めていると、彼らの未来のために何

か自分もしてあげられたらと心から思った。来年からは社会人として水環境と関わっていくことになるが、このバングラデシュスタディーツアーで感じた思いをいつまでも忘れずにいたい。

最後に、このような貴重な勉強の場を提供してくださった酒井彰先生にこの場を借りて心より御礼申し上げます。また、いろいろと御世話になりました保坂公人さん、松田旭正さんにも心より御礼申し上げます。

バングラデシュ・スタディーツアー 感じたこと・学んだこと

国際基督教大学 酒井 春奈

私がこのスタディーツアーに参加した一番大きな動機は、今まで開発に関わることを勉強してきたが、どこか遠い海の向こうの話を教室の中で議論することに疑問を感じていたことだ。このまま、大学を卒業し、就職をしてしまっただけでは学んだことが教室の中での議論で終わってしまうのではないかと。就職活動を始める前に、実際の現場、外の世界を体験し、そこで感じたこと、学んだことを今後の自分の学業、キャリア、生き方に生かして生きたい。と考えていた。

ちょうどそこに、以前、大学のプレゼンテーションで取り上げたことから興味を持っていたバングラディッシュへのスタディーツアーに父から誘われ、こんないいチャンスはないと思い参加を決定した。専門知識の薄い私であったが、みるもの全てが新鮮で、自分なりに多くのことを感じ、旅行では出来なかつたであろうことを学ぶことが出来たと思う。

今回のスタディーツアーのことを思い出して真っ先に頭に思い浮かぶのは、人々の姿である。珍しい外国人に凝視する農村の大人たち、はしゃいで付いて回る子供たち、街角で声をかけてくる若者たちだ。私自身高校時代に一年間留学をしていたのだが、その一年間以上に、文化や国境を越えた人の交流のすばらしさを体感した。

私が覚えていたベンガル語は「ケモン ア チェン？」(英語で言う How are you?)とか、「ドンノバット」(ありがとう)などの単語 5 つぐらいであったが、それでも会話をしようとすれば、何かが伝わった気がした。彼らの日常の中の一コマに、ジャポニ(日本人)と会ったことが残ってくればとおもう。

現在、もたれているいわゆる国際交流は先進国間、先進国と途上国のエリート達の交流に限られている。しかし、これから私達が迎える時代は、水問題や地球温暖化問題など、全ての国に関わる問題を多く抱えている。その中で必要なのは、限定された国々の間でも、エリート間の交流だけでなく、それらを越えた交流だと思う。

私が感じてきた以上に、人々の意識の中で他の国や、グローバルな問題は、どこか違う世界での話なのだろう。それは、特定地域に対する偏見や、そこから来る無関心から来るものが大きいのだろう。少しでも、人と人が触れ合う機会があれば、そういった無関心が少しは解消できるので

はないだろうか。

今回、このスタディーツアーで実際の NPO の活動を見させてもらったが、その中で、異なる文化、言語、習慣での活動の難しさを感じた。一つのことをするために多くの場所に足を運び、多くの人に会い、交渉をする。そのひとつひとつの難しさに驚いた。トイレの問題は安全な飲み水の確保や、衛生を脅かすというが、世界の人口の半数以上が屋内トイレをつかえる状況では無いという。それを聞くと、気が遠くなってしまう。

同時に、各団体の連携の重要さも感じた。こういった団体がお互いに協力することが出来れば、これから交渉などは少しずつスムーズになっていくのではないかなと思う。

地球規模の問題がもたらすミクロの被害、そしてそこで暮らす人々のこと、それに働きかける NPO や NGO などの市民団体の活動について学び、私自身の今後について考えさせられた。

今私達が抱える問題は、企業の利潤、人々の便利さの追求、途上国の工業発展などと相反するであるという印象が強い。このことが、人々の問題への無関心を更に大きくしているのだと思う。被害を受けるのが遠い海の向こうの人であっても、それは私達の毎日の排出物によるものかもしれない。遠い国の問題は、すでにそれでは終わらない域に達しているのだと感じた。

2年後の自分が一体何をしているのかはわからない。しかし、どのような形であっても、人、社会にこのようなことを呼びかけ、働きかけていく存在であり続けたいと思う。



東本願寺と環境を考える市民プロジェクト主催

「東本願寺のお堀探検 ～堀から環境問題と地域防災を考える～」が行われました

東本願寺と環境を考える市民プロジェクトでは、9月5日の日曜日、下京ルネッサンス協賛事業として「東本願寺のお堀探検 ～堀から環境問題と地域防災を考える～」を開催しました。多くの市民の方が参加され、環境と防災を考える良い機会となりました。日本下水文化研究会は関西支部長の木村さんを中心に数ヶ月にわたる準備に携わり、当日は協力団体として参加しました。本会以外の協力団体は以下のとおりです。東本願寺、環境市民、気候ネットワーク、京都・雨水市民の会、ピオトープネットワーク京都、災害から文化財を守る会、京都R（京路地フェスタ実行委員会）。今回は、ピオトープ、地域防災、ごみ問題に取り組むNPOが参加し、ネットワークが大きく広がったイベントでした。

当日は朝8時から東本願寺周辺の清掃を行った後、10時から「お堀探検」として、東本願寺南側のお堀の一部の水を抜き、生物の捕獲、ごみの採取、洗浄を行いました。お堀からあげられた生き物、ごみは、「生物ワークショップ」、「ごみワークショップ」で展示されました。



お堀探検風景

防災ワークショップ

防災ワークショップでは、江戸時代何度も消失した本願寺の消防のために明治時代に琵琶湖疎水を導水して敷設された本願寺水道の歴史や意義について、パネル展示を行いました。12時30分からのバケツリレーには子供を含め約70名の市民の方が参加し、体験を通して、地域防災においてお堀の水が役立つことを楽しみながら実感してもらいました。



バケツリレー

生物ワークショップ

お堀から採取した魚などを展示しました。多くの市民の方が立ち寄って「こんな魚がお堀にいるのか」と興味を示していました。お堀の水は本願寺水道を通して琵琶湖とつながっていますから外来種がみられました。



お堀の魚

ごみワークショップ

「お堀探検」で出てきたごみは洗浄・分別したうえで、展示しました。「これは何だ」とびっくりして多くの方が立ち止まっていました。今回はお米が袋ごと発見されるなど、ごみ問題とわれわれの生活を考える場となりました。



お堀から上げられたごみ

講演会・パネルディスカッションのお知らせ

関西支部では、拡大運営委員会（総会）として「水環境～河川と下水道～」をテーマに講演会、パネルディスカッションを行います。

記

日時 10月30日(土) 13時15分～17時

場所 大阪NPOプラザ

大阪市福島区吉野4-29-20, TEL: 06-6465-8390

協賛 大阪府河川ボランティア支援ネットワーク 21
NPO 法人水環境フォーラム

基調講演 大阪産業大学教授 菅原正孝氏

「水環境～河川と下水道～」

パネルディスカッション

「水環境を河川と下水道から考える」

お申し込みは FAX 06-6356-1077（本会関西支部）まで

国際シンポジウムのお知らせ

「地球の危機を克服する技術」

- 途上国・地域社会に適した新たな中間技術を求めて -
循環共生社会システム研究所 (KIESS, 代表内藤正明京大名誉教授) が主催する国際シンポジウムのお知らせです。

趣旨：地球温暖化など、深刻化する地球環境問題の克服には、新たな技術体系の必要性が次第に明らかになってきました。この「地球に優しい」技術が特に途上国や地域社会で実用化できることが鍵になります。それには「地域に適合した技術」またはかつて「中間技術」と呼ばれたものが重要なヒントを与えられと思います。

この国際シンポジウムは、KIESS が、平成 15 年度から 2 年間にわたって実施してきたプロジェクト「地方の技術・システムを用いた気候変動の緩和に関する能力開発」プロジェクト (アジア太平洋地球変動研究ネットワーク (APN) の持続可能な開発に向けた途上国の研究能力開発・向上プログラム (CAPaBLE) により助成) の一環として開催するものです。持続可能社会の形成のため、技術と地域社会が一体となった社会像を探るとともに、地球温暖化対策のための中間技術に関する世界の事例を学び、中間技術を活用した有効な温暖化方策を探りながら、そ

の内容を一般に公開し普及をはかろうというものです。

開催月日：2004 年 11 月 14 日 (日) 13:30 ~ 17:00

開催場所：独立行政法人国際協力機構兵庫国際センター (JICA 兵庫) (同時通訳つき)
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通 1-5-2

講演 1 『“エコトピア”からの 30 年』

アーネスト・カレンバック (米国)
(小説『緑の国エコトピア』著者)

講演 2 『エコロジカルな都市計画のコンセプトと方法』

エックハルト・ハーン (ドイツ)
(ドルトムント大学空間計画研究所所長)

講演 3 『ローカルでエコロジカルな循環技術の可能性』

ピーター・ハーバー (英国)
(Center for Alternative Technology/CAT)

参加人数：80 名 (参加無料。定員になり次第締め切り)

申込み先：下記までファックスかメールで、氏名、所属、住所、連絡先を記載の上 10 月末までに申し込み下さい。

NPO 法人循環共生社会システム研究所 KIESS 事務局

担当者：仲瀬、辻

E-Mail: ecosoundmail@kiess.org

TEL: 075-752-1133 / fax: 075-752-1153

詳しいプログラムなどはこちら <http://www.kiess.org/>

運営委員会・事務局より

本年度会費をお願いする際、寄付金 (カンパ) を募らせていただきました。この寄付金の使途につきまして、前号でお知らせいたしましたように、評議員会からのご意見を受けまして、本年度よりスタートした海外協力事業への配分を優先させていたしております。この寄付金ですが、おかげさまで 10 月 7 日時点で 31 万円以上の寄付をいただきました。また、賛助会員であります (株) 日水コン様より海外協力事業への特別寄付をいただきました。この場を借りまして、厚く御礼申し上げます。なお、海外協力事業につきましては、年度内にご報告の機会を設けたいと考えております。

屎尿研究会のご尽力により、今年度の定例研究会の日程がほぼ決まりました。会員の皆様におかれましてはぜひとも予定に入れていただき、多くの方の参加をお待ちしております。

編集後記 ▶今年日本に上陸した台風は 10 に達し、多くの堤防が破堤し甚大な被害をもたらしました。▶バングラデシュの首都ダッカでは 1000 万人以上の人口を擁しますが、堤防は完成していません。洪水はこの国に肥沃な土壌を運びますが、今年の洪水は 10 年に一度という規模で、上流から徐々に押し寄せてくる洪水は首都の低い地区の水位を押し上げていきます。メイン通りを少し入るとこのような光景がいたるところで見られました。▶この都市を浸している水は洪水だけではありません。あちこちで下水もあふれ出して、臭気を発しているのです。町中が合流式下水道になったようなものです。そのような中を人々はボートに乗り、あるいは腰まで浸かりながら歩いているのです。そんな状態がひと月も続きます。2 次災害として下痢症が発生し、多くの子供たちが命を失いました。▶このような事実

も行って見なければわかりません。この国を一緒に訪問した若い人からもらったメッセージにもありましたが、相互に理解し合うことはなかなか容易ではありません。お互いの発想の違いと相互理解の難しさをひしひしと感じているこの頃です。

(酒井 彰)



←ダッカ市内の浸水地域、建設中の建物のコンクリートスラブに避難して生活する人たち (今年 7 月の洪水時)

ふくりゅう 通巻 39 号目次

| | |
|---|-----|
| 第 31 回定例研究会のお知らせ | 1 |
| 2004 年バルトン忌報告 | 1・2 |
| 屎尿研究会特別企画の報告 | 3 |
| 中川金治を偲ぶ会のお知らせ 屎尿研究会第 31 回例会ならびに今後の予定のお知らせ | 4 |
| バングラデシュ・スタディツアー参加記 | 5・6 |
| 「東本願寺お堀探検」が行われました 関西支部講演会・パネルディスカッションのお知らせ | 7 |

特定非営利活動法人 日本下水道文化研究会

〒162-0067 新宿区富久町 6-5 NJS 富久ビル別館 3F

TEL & FAX 03-5363-1129 e-mail: jade@jca.apc.org

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご欄ください

<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>

関西支部 <http://www1.kcn.ne.jp/~k-atsumi/>